

文化財だより

第 11 号

平成10年 3 月

発行 真鶴町教育委員会

特集

発心寺阿弥陀如来立像

(真鶴町重要文化財第11次指定)

如来寺跡洞窟及び石仏群

(真鶴町重要文化財第12次指定)

真鶴の阿弥陀信仰を偲ぶ

真鶴町教育委員会

教育長 遠藤 勢津夫

「文化財だより」も、おかげ様で町民の皆様から好評をもって迎えられ、すでに第十号まで刊行し、本号(第十一号)の刊行となりました。今後とも、文化財の保護・活用の上で一層の内容の充実を図ってまいりたいと存じます。

さて、本号では、真鶴町重要文化財の第十一次指定「発心寺阿弥陀如来立像」と第十二次指定「如来寺跡洞窟ならびに石仏群等」の紹介を中心にまとめました。

発心寺阿弥陀如来像は、すでに平成二



発心寺阿弥陀如来立像 修復後のお姿

年度に町重要文化財として指定いたしていただきましたが、広く紹介する機会に恵まれないまま、今日に至ってしまいました。遅きに失したきらいはありますが、真鶴の阿弥陀信仰を示す貴重な資料として、是非皆様の御覧をいただければと存じます。前文化財審議委員の中路修平先生に貴重な原稿を頂きました。

如来寺洞窟石仏群につきましては、平成九年八月十八日に指定いたしました。

本石仏群につきましては、その重要性については早くから着目され、文化財審議委員会としても何回かの調査を実施してまいりましたが、指定の根拠の核心に迫り得ず指定がのびのびになっておりました。幸い民衆仏教研究家の宮島潤子先生をお迎えして詳細な調査と鑑定を頂き、指定にこぎつけることができました。先生のご協力、ご熱意に改めて敬意を表し御礼申し上げます。先生のご指導のもとに調査に当たられた文化財審議委員や教育委員会担当者の皆さん方に、紹介の原稿執筆をお願いいたしました。

本号により、真鶴の信仰の歴史に触れていただき、ありし日の人々の生活を偲んでいただければ幸いです。

目次

真鶴の阿弥陀信仰を偲ぶ……

真鶴町教育委員会教育長

遠藤 勢津夫 (1)

発心寺の阿弥陀如来像……

前文化財審議委員

中路 脩平 (2)

古文書等から見た如来寺……

真鶴町教育委員会

高 畑 誠二 (2)

但唱について……

遠藤 勢津夫 (3)

如来寺半鐘と百万遍数珠……

遠藤 勢津夫 (3)

洞窟の御仏たちと閻魔さま……

―地獄・問道・極楽の様子―

文化財審議委員

小野 間 松男 (4)

閻魔さまと地蔵さまの由来……

文化財審議委員

川 口 仁 齊 (6)

奪衣婆・檀拏幢・業の秤……

文化財審議委員

川ノ邊 昭治 (6)

いにしえの人々の生きた証……

―供養塔・墓碑銘を読む―

文化財審議委員

櫻 井 武 (7)

文化財審議委員会だより……

(8) 武

発心寺の阿弥陀如来像

中路脩平

真鶴駅から港に向かって、県道を徒歩で下ること十分、東海岸に程近い一角に発心寺があります。ここに約四百年（推定）もの間、本尊様として大切にされてきた阿弥陀如来立像があります。

本堂の奥の須弥壇には、大小の仏像が見られますが、左右に勢至・観音の両菩薩、中央におられるのが本尊の阿弥陀様です。それは黒褐色の漆塗の壇に、金色が映えて、重厚の中に輝きを増し、一段と尊く思われます。

本尊は総高（台座・光背を含む）百九十一センチ、像高は九十八センチの桧の一木造です。姿は上品下生印という手の組み方をし、亡くなった人を極楽へ迎える来迎仏の姿であるといわれます。平安時代中期の作風を残しながら、同後期の作とみられています。なお、京都風のおもかげも感じられるのが特徴のようです。

そもそも発心寺は、弘治元年（一五五五年）、貞厳和尚により開かれた浄土宗の寺院です。その後、小田原城・江戸城等の修築



発心寺本堂全景 阿弥陀様が安置されている

にかかわる岩の口開場の開発、風外和尚の来住等があり、当時の真鶴が次第に発展してくる中で、人々の本尊様に対する尊崇は高まっていきました。

本尊仏の作仏師や作仏年、また発心寺への経路については、証拠になるものもなく不明ですが、修復に関与された専門家の推測では、熱海市伊豆山の般若寺を経て、発心寺に來られたのではなからうかということです。

この本尊さまにも幾度か危機がありました。一つは、大正十二年（一九二三年）の関東大震災で、あの日、真鶴にも激震と大津波、更に大火災という

災難が襲い、見る間に村の大部分が焼野原に化しました。この発心寺も襲い来る猛火に焼け落ちました。当時の住職田辺密音和尚は、本尊仏と過去帳を背負って、山づたいに難を逃れました。二つ目は歳月による

老朽化でした。木像は何百年ごとかに大修理が絶対必要です。平成二年、檀家の人、小沢孝氏（横浜市在住）先祖は真鶴の漁業家青木定次郎（屋号は山之台）の芳志により、仏師西谷和雄氏が修復され、将来、五百年の耐久性が確保されました。檀徒だけでなく、真鶴町あげての喜びには計り知れないものがあります。

岩、如来寺跡洞窟・石仏群および念仏信仰に関する資料（古文書・金石文など）には、次のようなものがあります。年代順に並べてみますと、

- (1) 三界万霊塔（萬天等）（寛文十七年一六四〇）
- (2) 大日如来石像一尊安置（石仏台座 正保二年一六四五）
- (3) 覚仏碑・正蓮社覚尊上人（正保三年一六四六）
- (4) 岩村明細帳（延宝四年一六七八）

『半田家文書「古書類写集」所収（明治一十七年一八九四）』

- (5) 如来寺半鐘（梵鐘）（法屋伝生比丘代、大工、小田原住、青木源左衛門義重宝永二年一七〇五）
- (6) 校割牒、帰命山如来寺（享保十年一七二五）

(7) 新編相模国風土記稿（卷三十一、村里部足柄下郡卷之十「岩村 如来寺」天保十二年一八四一）

などがあります。

これらの古文書、供養碑、半鐘の銘文などを読み合わせていきますと次のよう

に考えられるのではないのでしょうか。新編相模国風土記稿により「帰命山如来寺」は元和六年（一六二〇）に建立されたと思われま

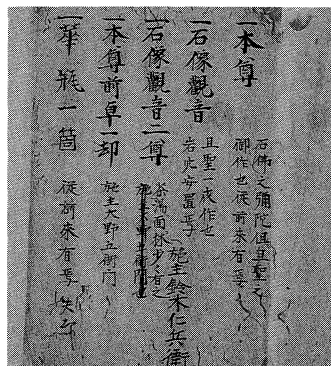
古文書等から見た如来寺

高畑 誠二

仏で月桂和尚が寛永十八年（一六四二）に開山したとあります。

しかし、その後にも大日如来「石像（台座（正保二年一六四五）や正蓮社覚尊上人の「覚仏碑（正保三年一六四六）が建立されています。

宝永二年（一七〇五）に村人達の合力で铸造寄進された半鐘の銘文や、享保十年（一七二五）の財産目録からは本尊弥陀は今まで通り安置され、但唱が一夜で仕上げた聖観音菩薩の石仏は岩穴に置かれていて、村人が百万遍の数珠を廻して念仏作善をしていた事がわかります。



如来寺校割牒 本尊が但唱の作とわかる

但唱について

遠藤勢津夫

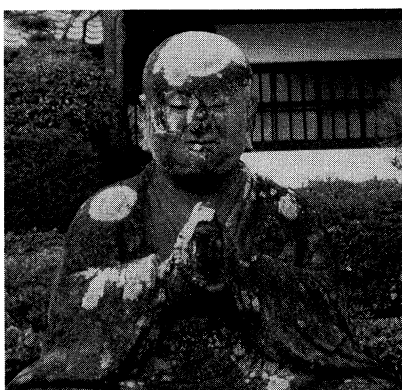
如来寺本尊石仏の作者但唱(但称・旦聖とも記す)は、天正七年(一五七九)、摂津国(兵庫県)多田郡に生まれ、十八才の時佐渡の檀特山で弾誓上人に弟子入りしたといわれます。弾誓は、のちに箱根塔ノ沢(阿弥陀寺)や大山一ノ沢(浄苑願寺)の洞窟を本拠に活動します。但唱は、慶長十一年(一六〇六)、一ノ沢で弾誓からその教えを相伝し、「念来(念来称帰命山)の法名を授かります。但唱の建立した寺々の「帰命山如来寺」の名称はこれに由来します。

弾誓や但唱一派の活動の特色は、木食行と作仏修業にあります。「木食」とは五穀を断ち、野生の木の実や草の根などで命をつなぎ、洞窟にこもり、滝に打たれながら念仏を唱えるなどの修業を通して悟りを開こうとする厳しい苦行です。「作仏修業」は、こうした苦行の中で、「千体」「万体」の作仏に励み、民衆の救済を願うものです。これらの行者は、「木食上人」とか「作仏聖」などといわれました。

但唱は、信州(長野県)の虫倉山や奇妙山などを中心に活動し、その足跡は富士山や伊豆地方にも及びます。また但唱は、鉱山や森林の開発のための「山見分け」の専門家でもあったようです。一人の念仏と大勢の念仏が融合し合って極楽

往生を実現するという但唱らの融通念仏は、鉱山労働者や石工・農民・漁民などの庶民に広く信仰されていきました。

寛永十一年(一六三四)、秀忠の死を弔うため、信州伊那松川の山中で刻んだ五智如来の木製大仏を船で品川に運び、芝高輪に五仏堂を建て、これを中心に寛永十二年(一六三五)には帰命山仏性院如来寺を建立、寛永十六年(一六三九)、天台僧上の東叡山寛永寺の末寺として公認され、融通念



京都蓮華寺にある但唱の像

仏を広める許可状を得ました。幕府の宗教統制が進行する中で、幕府の権力と結びつく形をとって教団の存続を図っていたのです。

但唱は、その晩年は、岩の如来寺を本拠に、石仏彫刻に励み、すばらしい石仏を各地に送り出しています。なかでも寛永十八年(一六四一)に京都に運ばれた、江戸の豪商樋口平大夫の願いによる五智如来は、現在も仁和寺の隣りの蓮華

寺にその偉容を示しています。如来寺洞窟の石仏群も、こうした但唱の営みと関連して考えることが必要でしょう。

但唱は、寛永十八年六月十五日、六十

如来寺半鐘と百万遍数珠

遠藤勢津夫

瀧門寺に伝存する「如来寺半鐘」には、次のようなことが漢文で刻まれています。

『相模の国の一隅にある祝村(岩村)の帰命山如来寺には、阿弥陀の石像が安置されており、村人たちは熱心に念仏を唱えてこれをまつている。しかしいまだに鐘がないので、人々の合力により銅鐘をつくり奉納することとした。そこで多宝山瀧門寺の僧随榮が次のような銘を作った。

信仰の氣に満ちあふれたこの鐘をつるして念仏を唱えんと、その声は寺堂にあふれてあの世にまでとき、近隣の寺々や村々にもかくれなくひびきわたる。鐘の音に耳をすませば妙なる仏のみ教えが聞こえてくるであらう。このすばらしい大なるしあわせとその恩恵は、永久に尽きることはないであらう。』

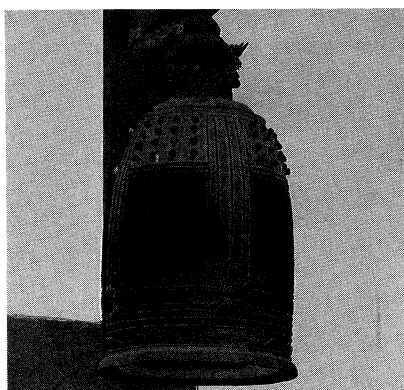
この半鐘が鑄造・寄進されたのは宝永二年(一七〇五)であり、その以前の十七世紀後半期には、岩村の人々の間で、念仏が盛んに行われていたことがわかり

一才で亡くなりました。東京西大井の養玉院帰命山如来寺には、小松石の立派な宝塔が建てられています。

ます。本尊阿弥陀如来石像を作った但唱死後半世紀、村民の信仰心は、半鐘を鑄造、奉納するまでになったのです。

また、如来寺校割牒は、「百万遍数珠」の存在を記録しています。その時々、村人たちが阿弥陀石仏のもとで、百万遍の念仏を唱和するために活用していたものと思われま

ところで、筆者の家にも「百万遍大数珠」(町指定重要文化財)が伝えられており、関東大震災前までは、疫病の流行した時など、村の人々が集まって念仏を唱え、安心を願ったとのこと。往時の如来寺を中心とした、念仏信仰の姿を伝える貴重な資料の一つと思います。



瀧門寺所蔵の如来寺半鐘 随榮の銘がある

み ほとけ えん ま 洞窟の御仏たちと閻魔さま 一 地獄・間道・極楽の様子 小 野 間 松 男

岩、大浦の一角に廢寺となつた如来寺の洞窟があります。大正十二年九月の関東大震災の時に、この真鶴地区は二メートルも隆起したそうですから、それ以前はすぐ前に岩海岸「前の浜」があつたと思われまゝ。この洞窟を海蝕洞と思われるかもしれませんが、中を子細に見ていきますと、粒状溶岩、通称、岩の赤石とか赤馬石といわれる、柔らかな岩盤を掘り進めた人工洞窟だということがわかります。

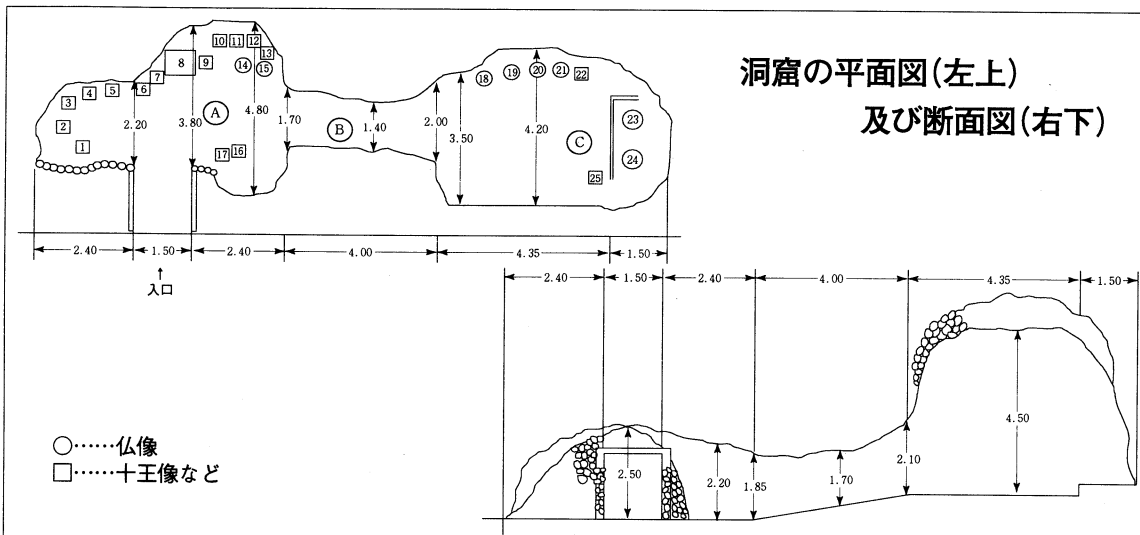
高さ二・三メートル、間口一・五メートル、元は半楕円アーチ形だつたと思われる下り勾配の入口を入ると、高さ二・五メートル、奥行（幅）三・八メートル長さ六・三メートルの、ひょうたん形をした部屋①の地獄洞窟となります。

この①洞窟の正面には、閻魔大王を始めとした十王像と俱生神・地藏菩薩それぞれ一、入口左側には奪衣婆像が並んでいます。又、海側を背にして檀拏幢・善悪人頭杖と業の秤が、深く彫り込まれた壁の前に置かれています。

①洞窟に続く②間道は幅一・四メートルの狭さ、高さも一・七メートルの低さです。長さ四メートルのゆるやかな勾配で登るようになっています。地獄と極楽を繋ぐ坂道と考えられ、ここには石造物は置かれていません。このアーチ形の通路を四メートル程進むと急に視野が開け、高さ四・五メートル幅四・二メートル奥行五・八メートルの大広間極楽浄土③となります。昔から明かりとりの窓が開いていたか、またはふさがっていたか定かではありませんが、石灯籠の置かれているのを見ると、暗い広間の中の灯明で「ホッ」とした気持ちにさせられたことだと思えます。

部屋の中に入ると、左側に如意輪觀音一尊と首欠け觀音菩薩立像、首を自然石で接合した釈迦如来像、閻

洞窟の平面図(左上)
 及び断面図(右下)



魔大王などが並んでいます。正面一段と高い場所には、大日如来（胎藏界）一尊と聖觀音菩薩と伝えられる菩薩座像があります。

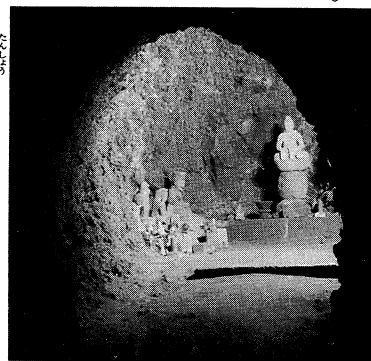
また、ここに、但唱作の本尊阿弥陀如来像が置かれていたという説もあります。

洞窟全体を眺めると、地獄・間道・極楽と、地獄が低く極楽が高いひょうたん型に構成されていて、明らかに人工洞窟だということがわかります。また、このことから、作仏聖但唱の宗教思想や、洞窟内で行われた、岩の石工や漁師をはじめとする多くの人々の念仏活動も偲べれます。

さて、十王像を眺める時、次のことを前提として見ていきたいと思えます。

十王本来の姿（本地）は、いずれも遠い昔に完成された仏（如来）や情け（慈悲）深い菩薩といわれています。

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	忌 日	十 王 名	本地仏名
三回忌	一周忌	百か日	四十九日	三十五日	三十七日	三十七日	三十七日	三十七日	三十七日	三十七日	秦広王	不動明王
											初江王	釈迦如来
											宗帝王	文殊菩薩
											五官王	普賢菩薩
											閻魔王	地藏菩薩
											変成王	弥勒菩薩
											泰山王（大山王）	薬師如来
											平等王	観世音菩薩
											都市王	勢至菩薩
											五道転輪王	阿弥陀如来



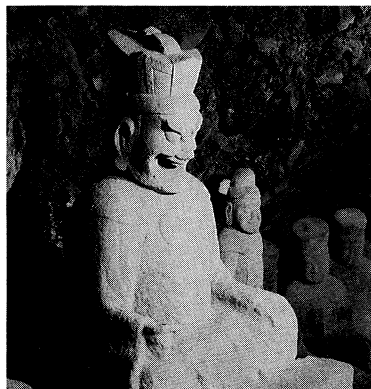
暗い間道の坂道より極楽浄土を望む

「人間は仏の悟りに達するまで、何度も生死を繰り返す」と考えられていますが、私達平凡な人間の悲しさ、多くの悪業を犯しています。「二度と過ちを繰り返さぬように」と、仏はものやわらかに慈愛の眼差しでさとしします。また十王となり、怒りの姿となつて亡き人の罪を咎め、あの世の途中（冥土）にあつて罪の軽重を決める」とも言われています。

如来寺跡の洞窟④の部屋、地獄と呼ばれる所に、閻魔大王初め十王像など多くの石造物があります。どの石造物も、新小松と呼ばれる、本小松より多少軟らかな輝石安山岩で造られています。

閻魔⑧は像高九十センチ、台座からの総高一・四メートルもある堂々としたものです。両脇に「人間が生まれた時左右の肩に止まり、一生の出来事や罪業を誤りなく記録する」俱生神二体の立像を従えて、入口正面に位置しています。

⑦の俱生神は首が欠けていますが、右手



洞窟内の閻魔像 眼光がするどい

に筆、左手に記録帳を持っています。像高七十五センチの⑨俱生神も同様です。「閻魔の裁きを記録する司録、書状を読む司命」ではないかという人もいます。

又、閻魔の向かい側には、一切の善悪を記録した巻物を持つ太山府君と、黒闇天女の首（面長二十四センチ・面幅十九センチ）を乗せた⑩の檀拏幢（善悪人頭杖）と、罪の軽重を計るという業の秤⑪（総高七十六センチ・幅二十センチ・厚さ十センチ・穴径七センチ）があります。

閻魔以外の十王の像高は五十二センチ、結跏趺坐（座った衣の幅）三十九センチは大体同じです。しかし、⑬⑭は冠の王の字が陽刻で、その他の王の字は陰刻です。それぞれの十王の名前は定かではありませんが、形態的特色は、②は膝の上に罪状記録書を置いています。③は右手に笏状の物、左手に玉を持っています。④は筆と思われる物。⑤と⑬は蓮の花を持っていますので、観世音の化身平等王ではないかと考えられます。⑥と⑪は両手で笏、⑩は経巻、⑫は先が欠けているが杖状の物を持っています。

入口左側に像高六十四センチの蓍衣婆像①があります。鉢巻をした姿は、室町時代の作と伝えられる鎌倉円応寺の木造蓍衣婆にも似ていますが、輪王座と呼ばれる右片膝を立てて右手で膝を抱えた姿をしています。

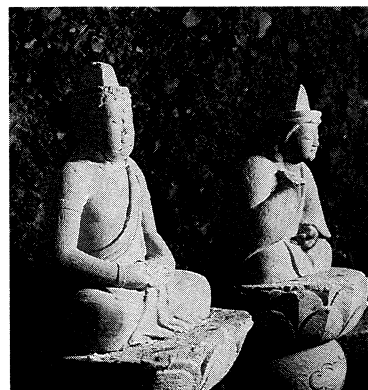
問道入口には、二体の地藏尊の石像が

あります。像高一・〇二メートルの地藏菩薩立像⑮は、東京西大井の養玉院如来寺の地藏尊の作風と似ており、但唱作の地藏菩薩と考えられ、閻魔大王の本地仏としての風格に満ちています。

もう一体⑭の地藏尊の台座には、「辛文久元年 花室妙哉禪定尼 俗名かよ 西三月十六日」と彫られており、死者追善供養のための地藏尊と考えられます。

狭い問道を通り抜け極楽浄土⑥に入ると、入口左側に、右膝を立てて右手を頬に当てた像高四十三・四センチの思惟・思索にふけた像、如意輪観音像⑮⑯の二体があります。十王と関係のないこの如意輪観音像が何故ここに在るのか不明です。如来寺墓地移動の時、女人墓石がここに移されたものか、月の出を待ち仲間と念仏を唱え語り合う、「月待ち講（七夜待ち・十九夜待ち・二十一・二夜待ち）女人講」の本尊としてここに祀られたものか、今後の研究課題です。又、阿弥陀三尊の脇侍とも考えられる首欠け観音立像⑰、首を補修した肩まで二十八センチの小さな釈迦如来座像⑱、一説によると、元禄以前に作られ移動されたと考えられる、像高五十五センチの閻魔座像⑲もここに置かれています。

極楽浄土と考えられる正面には、「新編相模国風土記稿」岩村明細帳（延宝四年・一六七六）に記されている「本尊弥陀、石仏長さ三尺五寸、但唱作」があったとも言われています。また、「帰命山如来寺校割



洞窟内の大日如来像(左)と伝聖観音像(右)

牒」に書かれている「石像観音 且聖一夜作也 岩穴安置焉」と合致すると思われる伝聖観音菩薩像（菩薩形座像）⑲が正面右側にあります。

手の組み方から判断できる像高六十一センチの胎藏界大日如来⑳は、記録には見られませんが、洞窟前の「願主 鈴木徳兵衛 大日如来石像一尊安置 岩村正保二年乙酉（一六四五）」の銘文を合わせ読むと但唱の宗教思想や作仏聖但唱の作風が浮かびあがり、但唱及びその一派の作と考えられます。

洞窟内の石仏群は、元禄の大地震（一七〇三）や津波と続く大災害の歴史のなかでいろいろと変化して来たと思われるます。

しかし、作仏聖但唱及びその一派の宗教・造仏活動と信仰深い石工の活動や人々の阿弥陀信仰が営々と続けられ、石仏群等を守り、今日に至ったと考えられます。

閻魔さまと地蔵さまの由来

川口仁齊

如来寺跡の洞窟に入ると十王の石像が並んでいます。中でも他の石像よりひときわ大きく、口を開けて、目を見開いた姿で、見るものに強烈な印象を与えるのは閻魔王の石像です。

もともと閻魔王は死後の世界の支配者と考えられており、インドの神話に出てくる神の一人であるヤマに由来するといわれています。これと中国における習俗や道教の思想である中陰（中有・現世と来世の中間の存在）の考え方が混合され、十王の思想が出来上がってきました。

人が死ぬと初七日、二十七日と七日ごとに次々と冥土の裁判所へ送られ、四十九日を経て三回忌までの十回、その人の生前中の罪状が審判されると考えられました。その裁判所の長官が十王です。

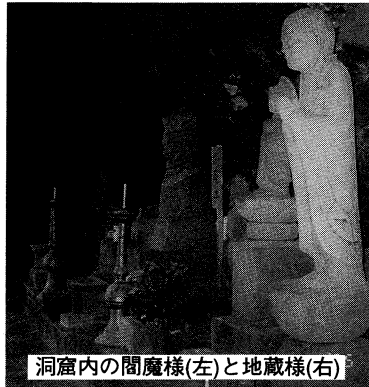
五七日（三十五日目）に送られる裁判所が閻魔庁といわれ、その長官が閻魔王です。上の開いた方形の冠をつけ、あげ頸の服を着て、両眼を見開いて叱咤の勢いをなしています。これは、中国の宋

時代の裁判官の服の制度にのっとったものといわれています。

十王の中で最も権威があるのが閻魔王であるとされており、如来寺跡の洞窟の石像の中でも、ひときわ大きく作られているのはそのためであると思われます。

閻魔王の両脇に立っているのは、俱生神または司命官と司録官であるといわれ、閻魔王の前にやって来た亡者の生前の善悪の行為を記録し、それを閻魔王に報告するのだといわれています。

閻魔王はただ恐ろしい姿が強調されていますが、実は、地蔵菩薩であるとされています。



洞窟内の閻魔様(左)と地蔵様(右)

います。地蔵菩薩とは、仏教の創始者であった釈迦牟尼仏の没後から、弥勒菩薩が成道するまでの間、如来になるまでの間の苦しみを救うため、どのような世界にも現れる菩薩であるとされています。

洞窟の中には、極楽へ抜けるための道である括れた部分の手前に立ち、そこを通る人を、慈愛心にあふれた優しい眼差しで見守っている、立派な地蔵菩薩の石像があります。これは地獄で苦しんでいる衆生を救い、極楽へ導くという意味であり、どのようなものも必ず救われるという仏教思想に基づいたものです。

奪衣婆・檀拏幢・業の秤

川ノ邊昭治

奪衣婆というところ――

冥土への旅の途中、死出の山を上り下つたあたりつく三途の川の端で、亡者を待ちうけている老婆の鬼が奪衣婆で、老爺の鬼が懸衣翁です。

奪衣婆が亡者の死装束をはぎ取り、それを懸衣翁が衣領樹の枝に掛けると、枝の垂れ下がりがあい、亡者の前世の罪の重い軽いが知れます。そこで、罪の度

合により、亡者は深さ激しさのちがう三つの流れ（三途の川）のどれかを、裸身で渡されます。向こう岸で亡者の罪を裁こうと待ちかまえているのは、閻魔大王以下の十王です。

檀拏幢とは――

「ダンダ」はサンスク



洞窟内の檀拏幢 黒闇天女の目がきびしい

閻魔王の左右に置かれた檀拏幢のうち、左を大山府君幢、右を黒闇天女幢といい、双方の記録した巻物（双幢の巻物）を読んで、閻魔大王が亡者に裁きを申し渡すのです。

業の秤については――

亡者の生前の罪の大小をはかるテンピン秤ですが、「体」の重さと「罪」の重さをいっしょにはかる秤で、重し（重石）は体の重さにしてあります。そして人と重しを両テンピンにかけると、亡者が重い罪を背負っていれば、重しの方が軽いのではね上ります。

地獄の鬼たちはこうして、亡者の生前に犯した罪の重さをはかり、奪衣婆で悪業を重ねながら嘘いつわりを申しても、これのとおりバレルのだぞ、と責め合っているのです。

窟内の檀拏幢のわきに、「業の秤」の台石がありますが、注意しないと見のがしてしまいうような大きさです。

死出の旅路につくと、初七日、二十七日、三十五日と、閻魔や十王の前で生前の罪を裁かれます。その時々、罪の重さ、度合いを証明するのが、これらをはじめ俱生神の記録などです。

秤にかけて計ります。

いにしえの人々の生きた証

― 供養塔・墓碑銘を読む ―

櫻井 武

平成元年から三年にかけ、町内有志による「如来寺跡整備委員会」によって、洞窟とその周辺跡地の整備が進められ、出土した約二百点の石碑類についても調査票が作成されました。この貴重な資料をもとに、江戸時代の如来寺と岩村の人々の信仰生活について考えてみました。

石碑類は九割が墓石で、残り一割が万霊塔、名号塔などと呼ばれる一般の供養塔でした。まず洞窟の入口付近にある供養塔について考えてみましょう。



洞窟入口と万霊塔
寛永十七年七月の銘がある

江戸前期、元禄の頃までの石碑類には「普号」と呼ばれる、浄土宗系の沙門の名が見られます。やはり、如来寺の礎を築

最も古いものは「三界万霊塔 南無阿弥陀仏」と大書された、寛永十七年(一六四〇)七月吉日の銘のある万霊塔です。「岩村明細帳」に見える如来寺の開山は寛永十八年。洞窟内の石仏を彫ったと伝えられる、木食、遊行の作仏聖。但唱上人が、岩で五智如来を刻み、京都へ送り出したのも、同じ十八年と確認されています。つまり、その前年の遺物がここに現存しているわけです。

万霊塔とは、有縁・無縁の区別なく、この

世のすべての存在に対して「愛」と思いやりの心(慈悲)を捧げ、その「働き(霊)」を慰めて、世の平安を祈るものです。大きな災害の後や大事業の成った後などに建てられました。すると十八年の如来寺開山説は正しいと考えられます。多くの苦難を乗り越え、前年に寺院建立の準備が整ったので

しよう。万霊を慰め、名号を刻んで、本尊阿弥陀如来に祈りを捧げたという。想像してもよいでしょう。江村前期、元禄の頃までの石碑類には「普号」と呼ばれる、浄土宗系の沙門の名が見られます。やはり、如来寺の礎を築いたのは、但唱上人の流れをくむ、浄土宗木食派の人々ではなかったかと思われる。その後幕末に至るまで、幾つかの供養塔が残されていますが、そこには必ず「南無阿弥陀仏」の名号が刻まれています。多くの墓石も同様です。後に禅宗の瀧門寺の傘下に入りながらも、如来寺では引き続き念仏信仰が伝えられていたようです。

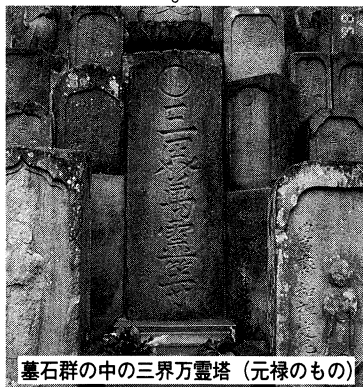
岩の人々が守った念仏信仰とはどんなものだったのでしょうか。よく知られる法

然、親鸞の念仏思想とは違うようです。それは山野で修行し(木食行)、定住せずに各地を遍歴(遊行廻国)しながら、死者を弔い、念仏を勧め、仏像を作ったりして、生涯を旅に生きた聖たちの信仰です。空也・行基、更に古代のまれびと神までさかのぼる古い信仰の系譜です。

幕末に石工先祖碑を再建した際、当時途絶えてしまった木食派に代わって、藤沢遊行寺の上人(時宗)。江戸時代を通して唯一遊行廻国を公認された念仏宗派の筆を仰いだのも、この信仰の系譜が岩の人々にとって依然大切であったことを物語っています。

それは何故でしょう。木食派の信仰は、南無阿弥陀仏の名号を浄土への救いの証とするとともに、天地自然の生きとし生けるものすべてが救われるという日本独自の仏教思想、天台本覚論に連なる密教的な世界観にも通じています。全宇宙の象徴である大日をはじめとする五智如来を尊び、名号を天地を鎮める力ある言葉として唱え、木や石を変じて仏を刻む信仰でした。

石屋渡世は大地そのものを切り開く稼業です。昨年話題となった映画「もののけ姫」の舞台「タタラ製鉄」の人々同



墓石群の中の三界万霊塔 (元禄のもの)

最も古い墓石は慶安元年(一六四八)のもので、「空風火水地」の五智の文字を刻んでいます。五智とは五輪ともいい、自然界を構成する五つの根元を象徴します。五智を刻むとは、自然の摂理を正しく認識することの意味します。石屋渡世の人々にとって、このことは、念仏の守りと共に命に関わる大切な教えだったことでしょう。

次に墓石の話に移ります。次のページのグラフに見られるように江戸後期に墓石が急減するのは、明治になり如来寺が廃寺となった後、新しいものが瀧門寺に移され、古いものが取り残されたからです。ところで、今一般的に「〇〇家」という形式の墓は見られず、先祖代々とのみ刻まれた、年代不明の墓石が二点あるだけです。最も多いのは、一個人の戒名を刻んだものと、子供だけの戒名を刻んだ墓です。子供だけの墓石は、実に全体の三分の一のばりです。元禄の頃まではほとんど

様、森を切り、大地を穿って立ち向かうのですから、きわめて強い自然の「タタリ」にさらされるわけです。それゆえに人々は、山野で修行し、荒ぶる神々を統御する力を身につけた聖たちの、南無阿弥陀仏という慈悲と鎮めの言葉が必要だったのです。

がこの形式でした。

その後、江戸中期八代將軍吉宗の頃から、夫婦と思われる男女の戒名が並記された墓石が増えています。ついでこの形式をもとに、子供などの戒名を書き加えて、数十年にわたって利用したと思われる「家族墓」の形式が多くなってきました。幕末の寛政年間になると、この形式に家紋をつけた墓石が見られるようになります。つまり、「〇〇家」の墓の前身になるわけです。

墓石というのは本来、亡くなった故人を追慕し、無事浄土へ生まれかわることを祈願する(菩提を弔う)ことが目的で、「家」という觀念が墓石に表現されるのは、ずっと後のことのようにです。

もう一つ意外なことがあります。二百近くの墓石が出土しながら、亡骸の痕跡や骨壺が一つも見つからなかった、とされることです。私たちは今、墓の下に骨となった亡骸が埋葬されていると考えま



墓石群
若者の話の墓石もこの中にある

す。これを「埋め墓」といいますが、実はこの形式も近年になって一般化した風習なのです。

日本では、古来、人が亡くなると日常生活圏から離れた山野や河原、海浜などの共同の墓所(蓮台野や鳥野辺、賽の河原などと呼ばれる)に、個人を特定せずに葬る風習がありました。亡骸を自然に戻すわけです。その後江戸時代になると、故人の菩提を弔うため、別に墓石を建てる習慣が一般化します。それに故人の戒名と祈りの言葉を刻むだけのもので、今日のように亡骸を葬った場所に建てるものではなかったようです。これを両墓制といいますが、如来寺もそうであった可能性が考えられます。

それを示唆するものとして、天明六年(二七八)の一つの墓石が注目されます。この墓石には故人の死について詳しいいきさつが刻まれていたのです。

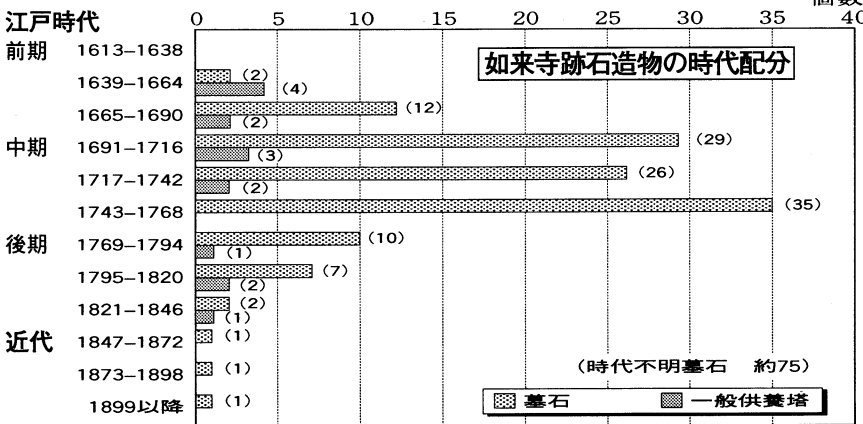
「ある人が二十五歳あまりで亡くなりました。人々は『幸い短き命』を思い、三日の間嘆き悲しみました。そして、『宅の東北』に葬った後、友人たちが彼を悼み、この寺に墓を建てました。」(大意)

とあったのです。その「宅の東北」がどこなのかわかりませんが、寺とは異なる場所であったことは確かなようです。ところで亡くなった人物は、人々に厚く信頼され尊敬されていたようです。彼は幼くして父を亡くし、母を助けて苦勞し

ながら成人したらしいことも、墓碑銘よりうかがえます。時に天明の飢饉の頃の事です。

このように、墓碑銘の一つひとつを読んでいくと、多くの人々の生きた証が読み取れます。ぜひ一度この地を訪れ、墓石の前に立って、いにしえの人々の言葉に耳を傾けていただけたらと思います。

如来寺跡石造物の時代配分



文化財審議委員会だより

平成九年度の実施事業より

◎第十二次重要文化財の指定

平成八年度から継続審議してきた「如来寺跡洞窟ならびに石仏群等」の真鶴町重要文化財指定の意見具申を行い、平成九年八月十八日の教育委員会において町重要文化財として指定されました。

◎重要文化財指定目録の発行

第十一次指定「阿弥陀如来立像」及び第十二次指定「如来寺跡洞窟ならびに石仏群等」を含む指定目録を発行しました。

◎文化財指定古文書の複製

平井敏正氏所有の次の古文書を複製しました。

「規定一札之事」(古文書の三十七)

近世の真鶴周辺の網漁業の実態を知ることができる貴重な資料です。

「入置申入札之事」(古文書の三十八)

幕末期の漁業活動の状況を知ることができ貴重な資料です。

◎町内所在の石造物調査

小松石・新小松石の良質な石材を産出する真鶴町には石碑、石仏など数多くの石造物が存在します。

その維持管理と保護対策の検討資料とすることを目的として、本年度は、岩地区を中心に石造物の所在確認調査を実施しました。